

〈参考資料〉をどう生かすか

—中学校英語—

筑波大学附属中学校教諭
(こいぬまのりあき)

肥沼 則明

★「評価の観点及びその趣旨」は、学習指導要領の教科目標を観点ごとに評価するためにわかりやすく整理したものである。

★「内容のまとめり」などの評価規準及びその具体例」では、具体的な評価事例を示してほしかった。

★英語科には「単元」ごとの評価はなじまないのので、「技能」ごとに特化した評価計画と評価活動を考えた方がよい。

★技能ごとの視点から見た評価専用場面（実技テスト）の具体例を紹介する。

★評価者間の判断基準のちがいは是正、定期テストの改善、指導の充実を図ることが、適切な評価を行うために大切である。

1. 新しい評価観と〈参考資料〉

(1) 混乱する現場

新たな評価のあり方をめぐって、各学校や地域では何度も研修会が開かれ、具体的な評価方法が検討されてきた。しかし、何をもとに評価計画を作成したらいいかはどこからも

示されていなかったのので、多くの場合はこれぞという評価方法を見いだせず、とりあえずの「評価計画」を示して、今後の動向を探りながら修正していこうという線で落ち着いた、というのが実態ではないであろうか。

(2) 評価計画作成における意義

そのような中で示された〈参考資料〉は、早くから真面目に取り組んできた学校や地域

にとってはやや時遅しの感があるが、実際には多くの学校で評価計画を作成する上で大いに参考になったと思われる。

〈参考資料〉で述べられている「評価の観点及びその趣旨」は、学習指導要領の教科目標と観点別評価を関連づけるものとして妥当な内容が示されている。各学校で評価計画を作成する際には、そのまま流用できるものである。

また、「内容のまとめり」などの評価規準及びその具体例」では、技能ごとの評価規準とその具体例が示されており、各技能で何を評価したらよいかがよくわかるようになってきている。ただし、それらを評価する具体的な活動と評価場面の例が示されていないので、現場では独自にそれを創出する必要があるだろう。

2. 〈参考資料〉の問題点

一方、〈参考資料〉の最も大きな問題点は、「単元の評価に関する事例」を示した点にある。他のすべての教科でも設定されている項目なので、それにならって作られたものであろうが、この「単元」という考え方は英語教育にはなじまないものである。

(1) 評価の妥当性の面から

英語科では、社会科や理科のように單元ごとに学習する内容が変わるといふことはない。それは、英語科の一貫した学習目標が言語技能を高めることにあるからである。言語技能は、連続したスパイラルな学習によって徐々に高まっていくものであり、「單元」といふような固まりで区切られるものではない。

また、言語技能を單元や単位時間のような短期間の成果として測定しても、それが本当の力がどうかは判断できないということもある。言語技能の本当の力は、教えてからある程度時間がたった時点で総合的に運用させてみて初めてわかるのではないであろうか。

(2) 評価の信頼性の面から

單元ごとに評価しようとする、題材の理解に関するものから言語材料の理解・運用に関するものまで、多種多様な評価項目が必要となってくる。これらの評価をすべての生徒について行うことは時間的に難しいが、ある行政側の指導者は「一度にすべての生徒を評価しようと思わず、数時間をかけて結果的に生徒を評価できればいい。」と語っていた。しかし、これには評価データの信頼性の点で問題がある。なぜなら、授業によって生徒に与えられるタスクは異なるわけであり、また

教師側の評価基準の揺れも大きくなること予想されるからである。したがって、このようなデータは、表面上は地道に蓄積されたように見えても、実はまったく信頼性の低いものになるのである。

(3) 評価の実際の面から

單元ごとの評価が膨大なデータを扱うことになることは(2)でも述べた。このことは評価の実際性という点でも問題がある。單元ごとに多種多様な評価項目について全生徒を評価し、それをすべての單元について行うなど非現実的である。仮に実際に行うとしたら、授業のほとんどの時間を評価活動にあてることになり、授業以外のすべての時間を評価を記録したりまとめたりする作業にあてることになるであろう。そうなると、当然指導すべき時に指導することもできなくなり、いわゆる「評価のための評価」だけで授業中の活動がいつぱいになってしまふ。観点別評価が導入された際にも、「チェックマン」と化した教師が問題となつたが、今再びそれが繰り返されようとしている。

ところが、多くの学校や地域で作成している評価計画もこの單元ごとの評価計画となっており、現場の教師も評価活動に対する見通しが甘かつたことがうかがわれる。実際、筆

者が夏休み中のある研修会に参加した英語教師約一三〇名に尋ねたところ、全員が單元ごとの評価計画を作成していたが、一学期末にそれを実行した教師は皆無であった。

3. 評価計画作成に関わる提案

では、これらの問題点を解決できる評価とはどのようなものであろうか。それは、〈参考資料〉では「内容のまとまりごとの評価」として取り上げられていること、すなわち技能ごとに特化した評価である。なぜなら、この視点での評価ならこれまでにも多くの教師が実践してきており、その妥当性・信頼性・実際性については証明済みだからである。

残念ながら、〈参考資料〉にはその実例の記述がないが、それぞれの教師、学校、地域には多くの実践が残されているはずである。それを掘り起こし、議論を重ねた上で共通理解を得て、評価計画を作成することを提唱したい。そうすれば、形式的・表面的でない、実質的な評価ができるようになるであろう。

4. 妥当性・信頼性・実際性のある 評価活動の実践例

ここでは筆者の学校で、三学年共通で行つ

ている評価専用場面を紹介することにする。

(1) 定期面接テスト(「話すこと」の評価)

生徒の「話すこと」の力は、授業中の活動における様子からうかがい知ることができ。しかし、実際に話す機会を与えないと適切な評価はできない。そこで、ここでは定期テストと並行して行っている、面接方式による「話すこと」のテストを紹介する。

① 実施時期

定期テストの前後に行う。ただし、都合によって学期末だけのときもある。

② 実施形態・内容

次の二つの型があり、ALTの配置時期によって使い分けている。

〈T型〉

ALTに対して三十秒〜一分程度のスピーチを行い、その後ALTの質問に答える。

JTEはその様子を観察して評価する。

〈ソロ型〉

生徒が行うことはT型と同じであるが、その他のすべてをJTE一人で行う。

③ 実施方法

授業時間の二時間を使って行う。待っている間は自習をさせておく。場所は廊下、隣の教室、放送室などである。

④ 評価の観点

前半のスピーチ部門では「内容」「英語」「話しぶり」を、後半のQ&A部門では「内容」「話しぶり」を評価する。

⑤ 留意点

前の生徒の終了の合図が次の生徒の持ち時間の開始とするようにして、生徒の入れ替えに伴う無駄な時間を極力排除するようにする。時間の管理には、キッチン・タイマーやMDプレーヤーのリピート機能を用いるといい。

(2) 定期音読テスト(「読むこと」の評価)

音読の力は実際に生徒に読ませてみればわかるが、授業中の指導の中で全生徒の音読を評価し記録することは難しい。そこで、本校ではReading Showと称した音読コンテストを実施し、公開発表方式で学び合いをさせると同時に音読力を評価している。

① 実施時期

年三回の長期休業直後に行う。休業中の学習の成果を発表する場としての意味もある。

② 実施形態・内容

休業前に学習した範囲の教科書本文を制限時間内読みつづける。自主学習を奨励しているNHKラジオ「基礎英語」のテキストを読んでもよい。

③ 実施方法

直前のクジ引きやリレー方式で、音読開始場所を決定する。教卓の所に行き、テープレコーダーのスイッチを入れて音読を開始する。合図が鳴ったら終了する。

④ 評価の観点

生徒には指導として「音量」「発音・リズム」「感情」の三点で評価することを伝え、項目ごとに相互評価をさせる。教師はこれらの三点に留意しながら総合点(五点満点)だけで評価する。また、アドバイスシートを渡して、教師からの励ましと助言を与える。

⑤ 留意点

「話すこと」の面接テストと同様に、時間のマネージメントをきちんとする。また、公開発表方式なので、聞く側の指導も徹底する。個人の発表はテープに録音させ、仲間の発表や自分の過去の発表と比較しながら自己分析させると、質の高い活動となる。

(3) その他の評価専用場面

① スキット・コンテスト(三学年共通)

「書くこと」と「話すこと」の評価場面として、ペアによるスキットの発表を行わせる。題材は教科書本文そのままやその改訂版、オリジナル作品の三つがある。いずれも発表を評価するほか、後の二つはシナリオも評価する。ペアで発表させるために、評価をどう個

人に振り分けるかという点で課題が残っている。

② Show and Tell (二年生)

「書くこと」と「話すこと」の評価場面として、二年生後期の週一時間をまるまる使って半年間行う。生徒は二〇〇語前後のオリジナル原稿を作成し、暗記して発表する。評価は、「内容」「英語」「話しぶり」「発表後のQ & Aにおける応答」の四点で行う。生徒も相互評価を行い、全生徒の評価票と教師の評価票をもとに事後のまとめを行う。

③ ディスカッション立論(三年生)

「書くこと」と「話すこと」の評価専用場面として、三年生後期の二十一回(毎回二人)行う。あらかじめ与えられた論題に対する自分の意見を十文程度で発表する。残りの生徒は、その意見を聞いて自分は賛成か反対かを述べる。発表者に対する評価の観点は、「内容」「英語」「話しぶり」である。

5. 評価をめぐる問題

(1) 判断基準のちがいと揺れ

ここまでに取り上げた評価方法は、広い意味で「観察法」と呼ばれる手法の一つである。この方法の最大の弱点は、評価者の判断

基準が評価者間で異なったり評価者内で揺れたりすることである。特に、評価者間のちがいはしばしば生徒や保護者の批判を受けることがある。各教師で重視する点がちがうことがあるのはやむをえないとしても、同じものを評価した際に少しでも評価のギャップを小さくしたいものである。

そのためには、地域や学校内でサンプルを使った合評会を開くのがよい。それぞれの教師が自分の評価の理由を出し合い、議論をして共通理解を図るようにする。

(2) 定期テストの問題点

評価についての議論では、授業の指導における評価ばかりが話題になって、実質上は学期末評定の一番の資料であるはずの定期テストについて何の議論もないのは実におかしい。しかも、若林俊輔・根岸雅史著の『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』(大修館書店)でも指摘されているとおり、テスト作りの基本を無視した定期テストがあたり前のように行われている実態がある。

本校では、両氏の提唱されている評価目的別の問題による定期テストを長年行っているが、このような形式のテストは観点別評価にもそのまま適用できる。なお、詳細は同書を参照していただきたい。

(3) 「説明責任」とは?

にわかによく耳にするようになったこのこ
とばは、教師が何をもってその評価をつけたかを明らかにするべきであるというものである。私たち教師にとっては、結果的に仕事が増えることになるわけだが、客観的に見れば至極当然のことである。評価において生徒や保護者との信頼関係を築くためにも、しっかりとやらなくてはいけないことであろう。

しかしながら、評価方法を明確に示せば「説明責任」を果たしたと言えるのであろうか。例えば、指導がいい加減だという実態があるとしても、それを改善せずに評価だけをきちんとしても、生徒や保護者は納得するものではない。逆に、日頃の授業における指導や家庭学習に対する指導をしっかりと行っているならば、結果的に出された評定に対して生徒や保護者は文句を言わないものである。私たちの行った評価が適切な評価と認められるためには、指導内容を充実させることが第一である。

